

公正な成績評価システム構築への取り組み

渡 邊 席 子

(大阪市立大学 大学教育研究センター)

1. 序

よりよい教育サービスを学生に提供するためには、教授法を工夫することに加え、成績評価を厳正に行うこともまた必要である。本研究は、学生及び教員ともどもに公正であると納得できる適切な成績評価方法の構築を目指して行われた探索的研究の経過報告である。

2. 成績評価システムについて

ここでいう公正な成績評価とは、手続き的公正(評価プロセスの公正さ)と分配的公正(実際に得られた評価の公正さ)の双方を満たした評価のことである。今回は特に、手続き的公正を高め、その結果として分配的公正も高められる方法を模索するための評価システムを考案・試行し、学生がそのシステムをどのように認識するのかを確かめることにした。

2004年4月から7月にかけて開講された筆者担当の講義科目『心理学』を履修していた女子短期大学1年生187名(2クラス)を対象に、授業中に出されたグループ課題への取り組み具合を学生同士で相互に評価しあい、それを成績評価に加える措置をとった。

- ① 学生は3~7名からなる小グループに分かれ、授業内容に関連するテーマついて寸劇シナリオを作成し、皆の前で発表する。発表までの準備期間は3~4週間である。
- ② 学生及び教員は、発表された寸劇に対する評価をそれぞれの観点から行う。
- ③ 発表終了後、各学生は発表の準備から当日までの諸活動を振り返って、自分以外のグループメンバーそれぞれに対し、発表に対して得られた評価点をどのように分配するかを決定する。
- ④ ②のプロセスで得られた学生及び教員からの総合評価点を、③に記した分配結果に基づいてグループメンバーそれぞれに分配する。
- ⑤ 試験期間が終了したのち(成績確定前)に行われる『講評授業』にて成績が各学生にフィードバックされ、あわせて成績評価基準についての説明も行われる。

上記のプロセスは、[1]各学生は成績が確定する前に評価結果および評価基準について知ることができるので、不当な点数を得た場合、教員に対してその是非を問うことができる、[2]教員がひとりひとりの学生の普段のパフォーマンスにまで十分に目を行き届かせることができなかつた分について、学生からの評価サポートを得る、の2点について手続き的公正を高め、その結果、グループ課題に対する各個人の投入量にみあった得点が与えられるシステム構築を目指すものである。なお、講評授業時に評価の適切さ等を訊ねる記名式調査を行った。記名式にした理由は、実際の本人の成績とのマッチングを行うためである。調査の際、学生には、調査への回答が成績を左右する可能性は一切ないことを強調した。

3. 分析結果

有効回答を得た178名による評価システムの適切さへの評価平均(7段階評定)は5.65(sd=1.17)であった。ただし、いくつかの先行研究より、成績評価フィードバック後に授業評価アンケートを実施すると、授業への満足度や教員に対する評価が低下するとの知見が示されている(牧野・西浦, 2002; 南, 2003)。そこで、本人が獲得した成績の影響が評価システムに対する認識と何らかの関連をもつのかどうかを探索的に調べるため、178名

を優獲得者と良以下獲得者との2群に分割し、その他の変数もあわせて比較を行った(表1)。

表1. 成績別に示した主な関連変数平均値・標準偏差・分析結果

	良以下 32名	優 146名	df	t	p
評価システムの適切さ(7段階評定)	5.22(1.34)	5.75(1.11)	176	2.34	p<.05
グループ課題点(40点満点)	26.16(4.55)	32.48(3.58)	176	8.53	p<.01
グループ課題点被分配ポイント(0.0~1.0)	.70(.20)	.93(.09)	33.73	6.27	p<.01
欠席・遅刻回数(回)	1.22(.97)	.16(.41)	33.40	5.97	p<.01
授業への満足度(7段階評定)	5.06(1.19)	6.17(.93)	176	5.76	p<.01
個人平常点(60点満点)	45.90(3.13)	54.75(3.30)	176	13.79	p<.01

分析の結果、優獲得者は良以下獲得者に比べて全般的に数値が高い(良い)方向にある可能性が判明した。優獲得者は普段からの授業態度がよいだけでなく、グループ課題にも真摯に取り組んでおり、その取り組みが他受講生・教員からも、同じグループのメンバーからも評価されていたといえる。また、評価システムの適切さについても、優獲得者は良以下獲得者に比して相対的に高く評価していたことが示されている。

4. 次の段階へ

今回行われた調査の結果は、成績評価システムの適切さに関する認識をはじめとした各種評価と、本人が得た成績との間に関連性が存在する可能性を示すものであった。今後、さらに議論を発展させるために必要と思われる主なポイントを以下に挙げる。

1)授業過程を振り返る 先行研究が示しているように、実際に得た成績(もしくは成績見込み)が良ければ他の評価もそれに引きずられて高くなる(あるいはその逆)との因果関係が強固に存在しているのならば、手続き的公正と分配的公正を可能な限り高めたとしても、成績による判断の歪みを取り除くのは難しい。しかし、それまでの授業過程における満足・不満の累積値の影響力がより大きいとするならば、たとえば授業の途中でこまめに調査を行って満足・不満の発生状況を常に観察し、毎回の授業にて前回までに判明している問題点への対処を行うことで、授業や評価システム、教員への評価の歪みを低減できるかもしれない。よって、授業の最後だけに限らず、一連の過程についてもデータを収集し、詳細な傾向分析を行う必要があるだろう。

2)授業方法と学生の負担感 今回筆者が試みたのは、学生をインボルブする効果をもつ反面負荷も大きい(講義を黙って聴いているだけではなく、自らすすんで活動しなければならない)学生参加型タイプの授業であった。学生たちは、授業にかかる負荷が大きいと感じればその分大きな見返りを欲するようになると思われる。このため、主観的負荷が大きかったにもかかわらず成績が低かった場合には投入量(負担)と報酬(成績や得られた知見の意義深さ)との主観的バランスが崩れ、授業全般に対する認識にも影響が出やすくなる可能性がある。どれだけ能率よくよい成績を獲得できるかが学生にとって実質的に重要な問題のひとつに数えられる以上、授業への負担感がどの程度学生による授業全般への評価に影響を与えるのか、多様なタイプの授業について比較検討して実情を把握する必要がある。

参考文献

トム・R・タイラー他(大淵憲一・菅原郁夫 監訳) 2000 『多元社会における正義と公正』 ブレーン出版

引用文献

牧野幸志・西浦和樹 2002 学生による授業評価と成績、満足度との関係 -成績の悪い学生は本当に授業を酷評するのか- 日本心理学会第66回大会発表論文集, 1092.
南学 2003 単位の認定・不認定の予告が授業評価に与える影響 大学教育学会誌, 25-2, 68-74.